

(3頁からの続き)

人の方が生きいきとしている”などと嘆いている人がいますが、それは、切り出された用木は、まだ根のある山の木とは違うということ。用木は期待される役目を果たすために、手入れもされるし磨きもかけられる。しかし、それを嫌がり拒否していれば、やがては打ち捨てられ、根がないので朽ちてしまうことになるのです。

しかるに、一方、必ずしも全ての人がよくになるわけではありません。ですから、自分がよくになるについての承認と協力を、家族や身近な人たちから得ることが必要になるのですが、それを得ることが容易でないことも、また、「ひながた」に示されているところなのです。

(4頁からの続き)

[補] 本連載 32 「その他の地域の海外伝道」でメキシコの天理教を書いたが、以下のように若干の補正を加えたい。

名古屋メヒコ教会を設立した安藤ペレス・せつ子は絵の勉強でメキシコに渡る前、名古屋大教会で森井敏晴会長（当時）から信仰の仕込みを受けた。森井会長から絵の勉強だけでなく、おたすけにメキシコへ渡るんだと、海外伝道への熱い思いを聞かされた。それは森井会長が二代真柱から教えられたことでもあった。メキシコでの安藤は美術学習とともに布教活動に勇躍し、大勢の若者をようばくに育てた。

(5頁からの続き)

けて死んだときに、そのながした血によって洗礼されて殉教者となる血の洗礼や火の洗礼などがある。天理教では殉教者という意識がそもそも不在であるから、それに対する儀式も不在である。しかし「みかぐらうた」の「いっせんにせんでたすけゆく」（九下り目の一）を「一洗二洗で助け行く」と漢字の訓読み表現をした場合（『おかぐらのうた』上田嘉成、天理教道友社、545頁、『みかぐらうた・おふでさき』村上重良校注、13頁）は、やまとことばではなく不自然で、くわえて天理教にも洗礼儀式があるのではないかと未信者には誤解されるおそれがないとは言えないであろう。筆者の「せん」論はやまとことばの多義性に触れて幕末の貨幣論から別項でおこなう。

(7頁からの続き)

くない。留学経験者と配偶者は、天理移民同様、ブラジルの天理教の「日系人化」を維持させる要因になったとみられる。また、同じ世代にはブラジルに移住して会長になっている日本人が7人おり、彼らも「日系人化」を強化しているともいえる。

しかし、その一方で、子弟世代は日本で「ブラジル人」アイデンティティを強く意識するようになっている。学生生徒講習会は子弟世代が企画しており、ブラジル人の感覚に合うように進められ、関心を高めている。このようにブラジルの天理教では「非日系人化」への模索が始まっている。

(10頁からの続き)

またもや行進中にストップ

7月27日午後7時、シチリアのパレルモで、カルメロ派の聖母マリア像の行進が、ポンティチェッロ通りの葬儀屋の前で、中年男の「生まれ」の一声でストップ。その葬儀屋というのは

マフィアのボスの経営だ。そのボスは捕らえられていて、北のノバラの刑務所に1年半も収容されているのだが、彼、アレッサンドロ・ダンブロージョは今40歳だ。

同じような事件があつてからまだ1カ月も経っていない。それは7月2日、イタリア半島の南のレッジョ・カラブリア州のオピード・マメルティーナで、自宅監禁の罪に問われている「ンドランゲータ」のボスの家の前で「恩寵の聖母マリア像」が、行進中にストップして、「お辞儀」をしたというものだ。その後、その時のマリア像の担ぎ手の25人が調査によって、7月9日に明らかにされた。その25人の中の一人は、「我々は『ドラングエータ』の二つの異なったグループに属し、神輿の前後に分かれている。しかし対立関係にあるのではなく皆友達だ」と語っている。

1800年代より「信仰会」と言う名目の小集団がシチリアではたくさん結成されていて、その実態はなかなか把握されないうでいた。例えば、このアレッサンドロ・ダンブロージョはカルメロ山の聖母マリア信仰会の信仰深き尊厳者と見られていた。地元の検事フランチェスコ・メッシオネは「この出来事は、この地区の日常生活に暗い影を落とした不幸な出来事である」と言及した。残念ながらマフィアのサブカルチャーは未だ生き残っているのだ。警察や陸軍警察の告発、逮捕そして内部告発にもかかわらず、事件のあったパレルモのパラロー界限では、40代のダンブロージョは、若者の間では神話的人物である。それは甥のフェイスブックへの次のような投稿でも読み取れる。「彼は我々全員の誇りである。」「彼は唯一者であり、特別者である。」この一連の出来事に、地区の神父ヴィンチェンツォは「不意の停止だった」「今年もまた起きてしまった」と呟いていた。枢機卿パオロ・ロメオはその行進のために代表団を送っていたし、ヴィンチェンツォ神父は「信仰会」のリストを要求されていた。事件のあった当日は枢機卿より特使も送られていたのだ。マフィアたちはこの「信仰会」を隠れ蓑にするのか、聖母マリア像の行進に非常に熱心だし、毎年復活祭前の聖金曜日の重大な聖行進を企画するのだ。これらの出来事はヴァチカンに苛立たせている。ヴァチカンの仲介は厳しさを増し、マフィアの介入を防ぐために「信仰会」の解散を求めている。

比較思想学会でパネル発表

金子 昭

比較思想学会第41回大会が7月20日、島根県松江市の中村元記念館で開催された。8本の個人研究発表、パネルディスカッション及びシンポジウムが行われた。私はパネルディスカッション「思想としての生命 第1回『出生と生命』」の部にパネリストとして発題した。パネリストとそのテーマは次の通り（発題順）。田中かの子・駒澤大学講師「いのちの『ありのまま』を引き受ける、という原則からの一考察」、安藤泰至・鳥取大学准教授「この世に生まれてくること—生命操作の時代のなかで—」、金子昭「人間的生命の出生をめぐる哲学的人間学の試み—」。コーディネータは沖永宜司・帝京大学教授がつとめた。